

中部の

エネルギーを 築いた



諏訪電気、伊那電気鉄道の創業者・辻 新次

～ 教育界から郷里信州富源開発のため実業界へ～

長野県諏訪地方における電気事業、電気鉄道事業については、「男爵辻新次翁」伝による諏訪電気株式会社と伊那電気鉄道設立などの記録が残されている。

長野県下の長野電灯、松本電灯、上田電灯、伊那電灯等の電気事業は地元の事業家によって設立されたのに対し、諏訪電気は地元出身の東京在住者を中心に設立され、本社も東京におかれた。

また、これより先、長野県に鉄道を通す計画の古くは明治初年、東京一大阪間を結ぶルートとして中山道と東海道の2案があったが、1884(明治17)年東海道線に決定した。その後1892(明治25)年に中央線計画の木曾谷、伊那谷両ルートが俎上にあがると、その誘致運動は中央政財界を巻き込んだ争いとなり、1894年、工事費などの理由で木曾谷ルートが決定した。そこで地元の関係者はその善後策として、辰野一飯田間に電車軌道を敷設する計画を立て伊那電車軌道株式会社を設立し辻新次が初代社長に就任した。

なお、「男爵辻新次翁」伝は、伊那電気鉄道と記録されているが、当初は軌道法によって伊那電車軌道を設立し、1919(大正8)年、軌道法から地方鉄道法による鉄道規格に変更し、伊那電気鉄道に改称されたので、ここでは伊那電車軌道とした。

辻新次は、文部省の生き字引と言われ次官まで昇進する一方で、信州の電気事業、電気鉄道事業の経営に携わった。

今月号は、郷里信州の電気事業、電気鉄道事業をもたらした地域の産業発展に尽力した辻新次を紹介する。



男爵辻新次

〔出典：男爵辻新次翁伝〕

生い立ち

辻新次は松本藩士・辻大淵介如水の2男として、松本城に近い上土町に生まれた。幼名は鼎吉、後に理之助・新次郎・新次と改名した。12歳で江戸に出て藩書調書に入り蘭学・英学・西洋兵学を学んだ。

1871(明治4)年、文部省設置に伴い、翌年、大学南校(帝国大学の前身)校長、明治7年に東京外国語学校(東京外国語大学)校長なども兼任した。1877(明治10)年、文部省大書記官に任ぜられ、東京大学の設立に従事

した。1885(明治18)年に内閣制度が発足し、森有礼が初代文部大臣に就任すると大臣官房長兼学務局長に就任、1886(明治19)年、初代文部次官に昇進し、文部省の生き字引と言われるまでになった。

1892(明治25)年、文部省を退官した後も、伊藤博文が創設した東京女学館初代館長に就任、1896(明治29)年に貴族院議員、1908(明治41)年、多年に亘る勲功により男爵が授与された。

教育界から実業界へ

辻新次が文部省を退官した当時は、まだ世間は官尊民卑の風が強く、高位高官の人が実業界に身を投ずるのは、一種の墮落のように思われていた。しかし辻は、1894(明治27)年、教員遺族の救済や教員互助の目的で、仁寿生命保険合資会社の社長に就任した。また郷里信州のために殖産興業の発達を祈念し、百年の計を慮って諏訪電気、伊那電気軌道の設立に尽くし、両社の社長に就任した。

(1) 仁寿生命保険合資会社

1894(明治27)年、西邑虎四郎(鐘淵紡績社長、三井銀行取締役)、三野村利助(三井銀行取締役)、下郷傳平らの主唱により設立され、請われて辻新次が社長に就任した。

「私の趣意は、あくまでも教員互助救済を目的とするにあり、保険事業は単なる営利に非ず、立派な公益事業であることが分かった。金儲けは問題ではない。その点十分にご了解願いたい」と申しでた。そして、会社名を人の死する時のことを心に浮かべるより、古語に「仁者壽」、また「仁者得其壽」と有り、これによって仁寿生命保険合資会社と名前を選定した。

辻が仁寿生命保険合資会社に関係したのは、薄給の教育家のために、その生活を保証し、安んじて国民教育に従事することが出来るようにと言う高遠の目的に他ならなかった。その後、この会社は1915(大正4)年に株式会社組織に改組、1940(昭和15)年、野村生命と合併、1947(昭和22)年、東京生命保険相互会社、2001(平成13)年にT&Dフィナンシャル生命保険株式会社となった。

(2) 諏訪電気株式会社

自伝によれば、「1897(明治30)年、高木守三郎、北村英一郎、池上仲三郎、関根親光氏と協力して資本金5万円の諏訪電気を設立。諏訪方面においても降旗倉蔵、両角直哉、小口長蔵氏等10数名の資本家がこれに加わり創立総会を開くことになったが、そこまでこぎつけるまでの苦心は一通りや

二通りではなかった。あいにく経済界の不況にぶつかったため株式の募集が意の如くならず、誰一人進んで応募するものもない有様であったが、辻氏ならびに高木氏らの苦心奮闘により、ともかくも満株にすることができた。」

ここに至るまでに当時の下諏訪町長・両角直哉は「本町地籍砥川上流なる東俣川及砥沢川の水流を引き、字落合上に発電所を設置し、上諏訪町、下諏訪町、長地村、平野村の区域内に於て、電灯電力を供給し電用の便利を図り度き旨、在東京高木守三郎ほか13名より水力使用承認願を差出せしにより、之を調査するに右区域内の4ヶ町村は製糸業の盛大なること全国無比の地にあるを以て、その便益を該業に与ふるは勿論、その他殖産興業に便利を与ふることあるや必せり。これがため上流下流において、著しき障害なしと云うに於いておや、依ってここに本会の意見を問う」と「砥川水力使用承認願に対する諮問」を下諏訪町会議長に明治29年に提出し、長野県知事の許可を得た。

諏訪電気の最初の発電所・落合発電所(出力：60kW)は1900(明治33)年に発電をはじめ、まず下諏訪町に電灯を供給し、続いて平野村、岡谷地方に供給を開始した。さらに「水からとれた火」の威力は、完全にランプや行燈をノックアウトして、あちらからもこちらからも点火の申し込みが殺到し、上諏訪町からも続々申し込みがあるので、翌年、資



落合発電所の外観

本金を7万円に増加(出力:120kW)し、極力その需要に応ずることにしたが、電灯の需要はますます盛んになるばかりか、有力製糸家より電力使用の申込みもあり、従来の発電力では到底その需要に応じきれなくなったので、明治41年、さらに資本金倍額の14万円に増加し、新たに東俣川、蝶ヶ沢に380馬

力250kWの蝶ヶ沢発電所を増設し、上諏訪、茅野方面の需要者に満足を与えることができるようになった。」と記されている。

その後、諏訪電気の経営は、小口長蔵(第2代社長)、尾沢福太郎(第3代社長)、片倉兼太郎へと在京のものから地元製糸業者へと引き継がれていった。

3 発電所の概要

発電所名	落合	蝶ヶ沢	砥川
運転開始年月	1900(明治33)年	1909(明治42)年	1914(大正3)年
発電機	芝浦製作所	芝浦製作所	芝浦製作所
水車	フォイト社	エッシャーウイス社	フォイト社
有効落差	50.9m	97.6m	48.18m
現状	60-120-200kW	250kW	350-450kW

(3) 伊那電車軌道株式会社

自伝によれば「長野県上伊那郡辰野を起点とし、下伊那郡飯田町に至る約38里間に鉄道敷設の計画があり、高木氏を通じて先生の賛助を求められたので、郷里の発展に資することができるならと、喜んで快諾、北村英一朗、今村清之介などの賛同を得て、明治28年、帝国ホテルにおいて発起人総会を開き、東京側の創立委員として、先生を筆頭に今村、北村、高木、潮田の諸氏が選ばれ、発起人上柳喜右衛門、渡辺猶人、池上伸三郎、村沢金三郎ほか40名の連書を以て、前記区間、電気鉄道敷設請願書を内務大臣に提出した結果、30年、首尾よく特許状を下付されたので、早速地方創立委員とも協議のうえ、資本金100万円、1株50円、2万株の募集に着手したのである。

ところが、諏訪電気同様、その頃はまだ電気鉄道なんてあまり類のなかった時代で、いわば新規の事業であるため、利益があるものやら、ないものやら、さっぱり見当がつかないため、進んで応募しようというものがない。加ふるに日清戦役の直後でもあり、経済界が一般に不況のどん底にあった際とて資本家側の応募も思わしくなかったため、やむを得ず、一次募集を中止し、隠忍数年、1906(明治39)年、改めて発起人に渡辺嘉一ほか24名を

加え資本金を150万に増加、池上、渡辺、金井、辻、上柳、高木、福原、小布施、浅田、北村諸氏が創立委員となり、辻先生を委員長に、高木氏を常務委員に選び、株式の募集に着手したところ、丁度経済界の景気も回復し、企業熱勃興の際とて、数日ならずして応募株数が募集株数に超過したので、按分比例を持って割り当てるという盛況であった。

会社では早速軌道の施設に着手する事になったが第1回の払込金を以ってなるべく長距離の運転をなさんとするには、発電所設置に要する資金を軌道敷設碑に転用しなければならぬ。それには幸い、下諏訪町に諏訪電気株式会社があり、辻先生や高木氏等が経営の実権を握っておるので、電力購入の便宜があるため、当分同社から電力を供給してもらおうじゃないかと云う議が重役の間に持ち上がり、辻先生も、相互の為よからうと賛成されたので、種々交渉の結果、諏訪電力との間に130馬力の電力供給の契約を締結し、落合発電所より松島変電所に達する間に特別高圧線を設け、所要の電力を得て開業に間に合わせたのである。

以上は、きわめて簡単に、諏訪電及び伊那電の成立経過を述べたにすぎないが、両社創立に至るまでの先生の苦心、努力というものには非常なものであった。しかもそれは単なる

営利の目的から出たのではなく、郷里信州の富源開発のため、100年の計を慮ってその成功に邁進されたのである。」と記されている。

その後、路線の延長が図られ、1927(昭和2)年、天竜峡～辰野間が全通開業、1937(昭和12)年、三信鉄道により天竜峡～三河川合間が全線開通すると、辰野～吉田(豊橋駅)間で4社(伊那電気鉄道・三信鉄道・鳳来寺鉄道・豊川鉄道)直通運転を開始した。1943(昭和18)年、全区間が国有化され飯田線となった。



諏訪電気と伊那電車軌道との関係

これまで述べてきたように、創立時の諏訪電気と伊那電車軌道とは密接な関係を持っていた。設立発起人、本社所在地や主要な経営者は次のとおり共通する。

このうち中心的な役割をした高木守三郎は、茅野市米沢村出身、東京専門学校卒業後、東京日日新聞の記者となった。中央の第一線の記者として文明開化を敏感に受け止め、東

京から帰郷の都度、信越線大屋駅から歩いて和田峠筋の水量を調べた。うっそうとした御料林が水源をなし、諏訪湖周辺で一年を通じて自然流量が安定しているのを突き止め選んだ。また、大師気鉄道(現在：京浜急行電鉄)の設立発起人となり、1901(明治31)年取締役就任した。

(1) 諏訪電気と伊那電気軌道の創立

創立時の経営者

	諏訪電気	伊那電車軌道
許可	明治29年	明治30年
創立	明治30年	明治40年
開業	明治34年	明治42年
本社(明治31年)	東京市神田区今川小路	—
(明治42年)	東京市京橋区新富町	東京市京橋区新富町
社長	辻新次	辻新次
取締役	高木守三郎	高木守三郎
監査役	池上仲三郎	池上仲三郎
取締役	北村英一郎	
発起人	潮田伝五郎	潮田伝五郎
発起人		北村英一郎

(2) 発電所の建設

前述したように落合・蝶ヶ沢両発電所は諏訪電気によって建設された。一方、伊那電車軌道は諏訪電気から砥川の水利権を譲り受け、1913(大正2)年、砥川発電所を建設した。落合水力発電所放水路から少し下流で取水、有効落差48.18mで350kWを発電した。水車はフォイト社製、発電機は芝浦製作所製

であった。

水圧管の前にある貯水槽に「滾滾不盡(こんこんとしてつきず)」と刻まれ、末尾に「大正癸丑之秋(大正2年の秋)男爵辻新次書」の扁額が残されている。

なお、辻新次の主な略歴は次のとおりである。

(寺澤 安正)

辻 新次の略歴(1842～1915)

1842	天保13	信濃国松本上土屋敷に生まれる
1861	文久元	江戸に上り苦学、大砲の鑄造、火薬製造等を学ぶ
1866	慶応2	火薬製造中、爆破、火傷。開成所化学教授手伝並出役。
1870	明治3	新次と改名
1871	明治4	文部省設置。任文部権少丞兼大助教
1872	明治5	大学南校校長
1874	明治7	東京外国語学校校長
1875	明治8	東京書籍館(帝国図書館の前身)館長事務取扱
1877	明治10	東京大学設立
1879	明治12	教育令発布
1883	明治16	大日本教育会結成、役員選挙により初代会長に選出
1885	明治18	森有礼初代文部大臣就任に伴い、大臣官房長兼学務局長
1886	明治19	初代文部次官に就任、仏学会・東京仏学校設立・仏学会初代会長
1892	明治25	文部次官、大日本教育会会長を辞任
1893	明治26	東京女学館初代館長
1894	明治27	仁寿生命保険合資会社社長に就任
1896	明治29	貴族院議員に勅選
1897	明治30	諏訪電気(株)創立総会
1900	明治33	諏訪電気・落合発電所運転開始(出力：60kW)
1907	明治40	諏訪電気の関係会社・伊那電車軌道(株)設立(社長：辻新次)
		伊那電車軌道(株)取締役社長就任
1908	明治41	勲功により男爵を授与される
1909	明治42	諏訪電気・蝶ヶ沢発電所(出力：250kW)完工
1910	明治43	仁寿生命合資会社辞任
1913	大正2	伊那電車軌道・砥川発電所(出力：470kW)完工
1915	大正4	死去、
1919	大正8	伊那電車軌道(株)から伊那電気鉄道(株)に社名変更